

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第110集

掛之上遺跡

平成9年度二級河川原野谷川社会環境基盤重点河川事業
(地方特定)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第110集

掛之上遺跡

平成9年度二級河川原野谷川社会環境基盤重点河川事業
(地方特定)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

掛之上遺跡の発掘調査は原野谷川の改修工事に伴って実施されたものである。静岡県袋井土木事務所の委託を受けて、当研究所が平成9年度に現地調査と資料整理報告を行った。

掛之上遺跡で発掘調査が実施されたのは、3回の袋井市教育委員会による調査に次いで4回目である。今回の調査では、弥生時代から古墳時代にかけての多くの遺構・遺物が確認された。

以前の調査では、弥生時代中期後半の方形周溝墓が群としてまとまって検出されたり、古墳時代後期と思われる大型の柱穴の掘立柱建物群が検出されたこと、そして、遺跡内に前方後円墳の孤塚古墳が存在することなどから、県内の重要遺跡として『静岡県史』に所収された。

また、隣接する大門遺跡は掛之上遺跡と同時期の遺跡であり、大門遺跡内にある大門大塚古墳、掛之上遺跡内にある孤塚古墳を含め、それぞれの関連が注目される。

大門大塚古墳は1986年（昭和61）に県の史跡指定の候補になることを目的とした発掘調査及び資料収集が行われた。私も特別調査員として参加したが、埴丘の築造法に「土のう積み」という技法が用いられている可能性があり、注目された。また文献調査では、1883年（明治16）の発掘について明らかにされた。明治政府による陵墓取調が目的であったが、伝説のような南北朝時代の後醍醐天皇の皇子の宗良親王の墓ではないことが確認されて、陵墓からはずれて、発掘の際に出土した土器・馬具・鏡などは地元に返却されたが、これらは当該期の基準資料になっている。

今回の調査では発掘面積の狭さから、多くの遺構・遺物に対しての検討に限界があった。しかし、隣接する地域を袋井市教育委員会による大規模な発掘調査が計画されているようであり、その成果に期待したい。また、その際に今回の調査結果が一助となれば、あるいはさらに今回の調査地点と有機的に結びつくことになれば幸いである。

最後に、発掘調査ならびに資料整理・報告書作成に深い御理解と御協力をいただいた静岡県袋井土木事務所、静岡県教育委員会、袋井市教育委員会をはじめとする関係機関や多くの関係者の方々に心から感謝の意を表したい。また、残暑厳しい折りの水道もない不便さの中での発掘調査や、地道な資料整理作業に参加された多くの方々の労苦をねぎらいたい。

平成10年3月

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長 斎藤 忠

例　　言

1. 本書は、袋井市高尾870番地の1外に所在する^{かげの うえ}掘之上遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成9年度二級河川原野谷川社会環境基盤重点河川事業（地方特定）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県袋井土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと袋井市教育委員会の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成9年9月1日から平成10年3月31日まで実施した。
3. 調査体制は次のとおりである。
所長 斎藤忠、副所長 池谷和三、常務理事兼総務部長 三村田昌昭、調査研究部長 石垣英夫
調査研究三課長 渡瀬治、調査研究員 飯塚晴夫、長尾一男
4. 本書は調査研究員飯塚晴夫が執筆した。
5. 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。
6. 発掘調査資料は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。

目 次

序
例 言
目 次

第I章 調査に至る経緯	1
第II章 位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	3
第III章 調査の方法と経過	4
第1節 調査の方法	4
第2節 調査の経過	4
第3節 基本土層	5
第IV章 調査の成果	6
第1節 遺構	6
第2節 遺物	14
第V章 まとめ	24

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	2
第2図 周辺地形図	2
第3図 調査区全体図・土壠図	7・8
第4図 土坑SF26、SF107実測図	9
第5図 土坑SF10、土器集中箇所SX194実測図	10
第6図 土坑SF01、SF64、SF54、SF141実測図	11
第7図 土坑SF80・84、SF144、SF31、SF35実測図	12
第8図 据立柱建物跡SH01実測図	13
第9図 弥生土器実測図・拓影図（1）	19
第10図 弥生土器拓影図（2）	20
第11図 須恵器実測図・拓影図	21
第12図 土師器実測図	22

挿表目次

表1 周辺遺跡地名表	2
表2 出土土器一覧表1	26
表3 出土土器一覧表2	27

図版目次

- 図版 1 調査区全景（西から）
- 図版 2 1. 調査区全景（東から）
2. 調査区遠景（北から）
- 図版 3 1. 土層断面
2. 土坑SF26 土器出土状況
- 図版 4 1. 土坑SF107 土器出土状況
2. 土坑SF10 土器出土状況
- 図版 5 1. 土器集中箇所SX194 土器出土状況（東から）
2. 土器集中箇所SX194 土器出土状況（北から）
- 図版 6 1. A-I グリッド 土器出土状況
2. ピットSP145 土器出土状況
3. ピットSP53 土器出土状況
- 図版 7 出土土器（1）
- 図版 8 出土土器（2）
- 図版 9 出土土器（3）
- 図版10 出土土器（4）

第Ⅰ章 調査に至る経緯

掛之上遺跡の発掘調査は、平成9年度二級河川原野谷川社会環境基盤重点河川事業（地方特定）工事に伴うものである。遺跡付近は、原野谷川が西に向かって蛇行するちょうど攻撃斜面にあたり、河岸はこれまでに何度か崩落を起こし護岸工事が行われてきたが、今回新たに護岸改修工事が実施されることになった。

掛之上遺跡は周知の遺跡として登録されており、過去に2度の発掘調査が行われている。弥生時代の方形周溝墓をはじめとする縄文～古墳時代及び中世の集落・墓域という遺跡である。

この工事によって遺跡の工事予定地内の部分が破壊・消滅するため、予定地内の遺跡の取扱いについて、県教育委員会文化課と袋井市教育委員会とによって協議が行われた。工事予定地内の遺跡の範囲の長さは約120mであるが、幅は広い所で約4mと狭い所で、約10mの垂直に立つ崖上に位置する。そこで発掘調査を実施するに十分な幅が確保できる、平均幅3m、長さ35m、面積105m²の範囲については発掘調査とし、その両側の幅の狭い箇所については袋井市教育委員会による立会調査とすることになった。そして、発掘調査については文化課を指導機関とし、当研究所が委託を受けて実施することになった。

調査計画は、隣接する地域を試掘調査している袋井市教育委員会の試掘調査資料の提供を受け、これと、2度の発掘調査結果を基に立てられ、9月より実施された。

第Ⅱ章 位置と環境

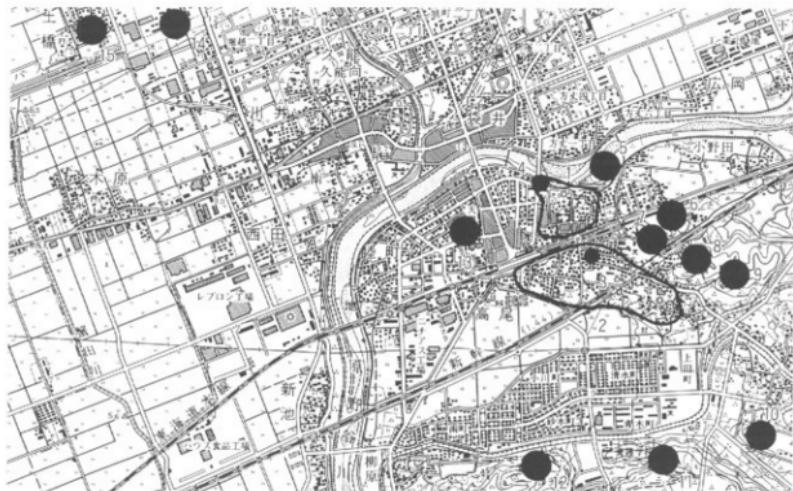
第1節 地理的環境

掛之上遺跡は袋井駅から北東に広がる市街地内に所在する。今回の調査地点は駅の北東約400mのところで、地番は袋井市高尾870番地の1外である。

小笠山丘陵西北端の標高18mの台地上に立地する。丘陵の西には太田川が、北から西にかけて原野谷川が流れ、これらが形成した広大な沖積地が広がっている。

小笠山丘陵は海拔264mを最高としその尾根筋が南西方向に緩やかに下がっている。小笠山丘陵末端部は支尾根が枝状に張り出しており、掛之上遺跡はこのうちの西北端の長さ約1km、幅600mの西へ延びる尾根に載っている。尾根上は比較的平坦面を形成し、台地状となっている。

原野谷川は掛川市内北端の八高山に源を発し、蛇行を繰り返しながら南進して、小笠山丘陵付近ではこれに沿って西流する。そして、丘陵の西裾を回るように再び南に向かい、太田川と合流する。掛之上遺跡付近では、丘陵に沿って小さく蛇行しながら西に向かうが、ちょうど攻撃斜面にあたり、台地を浸食して比高差約8mの崖を形成している。この浸食によって掛之上遺跡の北線は削られ、遺跡の範囲内にある狐塚古墳の後円部も失われている。



第1図 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	掛之上遺跡	縄文～古墳・中世	6	井守塚古墳群	古墳	11	高尾向山遺跡	弥生・古墳			
2	大門遺跡	縄文～近世	7	地蔵ヶ谷古墳群・横穴群	古墳	12	团子塚古墳群	古墳			
3	大門大塚古墳	古墳	8	大門山古墳群	古墳	13	御所森古墳	古墳			
4	狐塚古塚	古墳	9	渋垂神社上古墳群	古墳	14	堀越遺跡	古墳～中世			
5	掛之上II遺跡	古墳・中近世	10	雲座D古墳群	古墳	15	土橋遺跡	弥生～近世			

表1 周辺遺跡地名表



第2図 周辺地形図 (1 : 2,500)

第2節 歴史的環境

掛之上遺跡の今回の調査によって、主に弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が検出された。そこで、この時代に該当する周辺遺跡について、その概要を述べてみる。

掛之上遺跡の載る丘陵部分は遺跡が密集しており、大門・掛之上遺跡群と捉えられている。東海道本線を境にして北側が掛之上遺跡、南側が大門遺跡に分けられている。今回の調査区は、掛之上遺跡の北西部に当たる。

掛之上遺跡の北西部には孤塚古墳が、そして大門遺跡内には大門大塚古墳が含まれている。古墳は他に、丘陵東側部分に地蔵ヶ谷古墳群・横穴群、井守塚古墳群、大門山古墳群が分布している。

一方、掛之上遺跡東側の原野谷川沿いには掛之上II遺跡が、丘陵西側には御所森古墳と三門遺跡が位置する。北西の太田川中流域の微高地上には、鶴松遺跡、鶴田遺跡、土橋遺跡などの弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺跡が分布している。また、低地を挟んで南に位置する丘陵には挂甲を出土した团子塚古墳群が見られる。

掛之上遺跡の発掘調査は、袋井市教育委員会によってこれまでに3度実施されている。第1次調査の地点は今回の調査地点の西側で遺跡北西隅にあたり、1974年に孤塚古墳とともに行われている。弥生時代中期及び後期の方形周溝墓14、古墳時代後期の竪穴住居跡4と掘立柱建物跡5を検出している。弥生時代中期の方形周溝墓はこの地域では類例が少ない上に、ある程度の群として検出されたことは、その構成を考えるうえで貴重な資料と評価されている。また、古墳時代後期の掘立柱建物群は、方向性があることから豪族の居館関係と推定されている。

孤塚古墳は掛之上遺跡の1次調査地点内にあり、同時に発掘調査が実施された。推定規模43mの前方後円墳である。後円部の大半は原野谷川によって削り取られており、主体部も確認されなかった。時期は5世紀後半と推定されている。

第2次調査は1982年に行われ、地点は遺跡の西側のやや北寄りで、今回の調査地点の南約100mに位置する。弥生時代中期の方形周溝墓1、土坑8と古墳時代の竪穴状遺構1が検出されている。

第3次調査は1988年に行われた。遺跡の西端のやや南寄りで、今回の調査地点から南へ約200mの地点である。弥生時代中期の方形周溝墓1、掘立柱建物1が検出されている。

隣接する大門遺跡は、掛之上遺跡の南側に位置し、丘陵南端まで広がる広範囲な遺跡である。1962年に県教育委員会が遺跡南端にあたる地点を、袋井市教育委員会が1982年、83年、87年、89年に中央部東寄りの地点をと、5次にわたって調査している。

第2次調査では、弥生時代中期から後期の竪穴状遺構、大型掘立柱建物跡、方形周溝墓、土器棺などと、古墳時代から奈良時代の大型掘立柱建物跡などが検出されている。この大型掘立柱建物跡は、古墳時代の豪族の居館に關係する倉庫群、あるいは奈良時代の官衙の倉庫群の一部と推定されている。また、第4次調査では、弥生時代中期から後期の竪穴住居跡や土坑、古墳時代前期の掘立柱建物跡などが検出されている。

大門遺跡内には大門大塚古墳が存在している。径約30m、高さ約4.5mの円墳で、周辺の古墳群からは独立しており、後期古墳としては市内最大規模である。1883年に明治政府により陵墓取り調べの一環として発掘されている。そして、1986年に県史跡指定を前提とした基礎資料収集のための発掘調査が実施されている。

第III章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

グリッド配置については、調査区が幅3m、長さ35mと幅が狭く細長いため、方位を基準とはせず、調査区の長辺に平行する線を基準とした。10m×10mのグリッドを設定し、西から東へ1・2・3・4・5と数字で、南北方向をアルファベットで表示することにした。実際には幅が3mのため、グリッドはA1・A2・A3・A4・A5のみである。グリッドの南北方向はN-1-Eである。グリッド設定の際の基準点の測量は株式会社フジヤマに委託した。

図面については造構平面図と土層図は縮尺1/20で作成し、遺物出土状況図は縮尺1/10で作成した。測量はトータルステーションによって1m方眼を組んで行った。写真については、6×7判(白黒)と35mm判(白黒・カラーリバーサル・カラーネガ)を使用し、全景写真はローリングタワーにより撮影した。また遺物写真は6×7判(白黒)を使用した。

遺物の取り上げについては、包含層中のものはグリッドごとに行ったが、主な遺物(187点)はトータルステーションで位置と標高を計測して取り上げた。

造構はその種類を記号により表記した。土坑SF、小穴SP、土器集中箇所SX、掘立柱建物SHである。本書の中ではこれらの記号を用いて記述している。造構番号は造構の種類に関係なく、通し番号を付した。検出順のため、基本的に調査を進めていった西から東(A1~A4)に向かって番号が付されている。

第2節 調査の経過

9月より調査準備に入り、表土除去後、9日より発掘調査を開始した。重機によりIII層遺物包含層上面まで表土除去を行った後、人力により遺物包含層の掘り下げを行った。まず、調査区の両端と中央の3カ所で遺物包含層の厚さを調べるとともに、その内の1カ所は下層のIV層黄褐色土層を地山砂礫層まで掘り抜き、下層に造構・遺物が見られないことを確認した。

遺物包含層の発掘は、調査区が細長いため西半部(A1・A2グリッド)から始め、掘り上げ後に造構検出・発掘作業を行いながら、東半部(A3・A4グリッド)へ移っていました。調査を進めていく中で、調査区の東端部と西端部とともに造構が区外へ延びていることが確認されたため、調査範囲を西端で2m、東端で1m拡張した。

調査経過を以下に記す。

9月1日～5日 調査準備、器材搬入、重機による表土除去

9月8日～12日 西半部(A1・A2グリッド)包含層発掘、造構検出

9月16日～19日 西半部造構発掘、東半部(A3・A4グリッド)包含層発掘

9月22日～26日 西半部造構発掘、東半部包含層発掘

遺物出土状況写真撮影・実測(SF26・SF10・SF66)

9月29日～10月3日 西半部造構発掘、東半部包含層発掘、造構検出・発掘

10月6日～9日 造構発掘、遺物出土状況写真撮影・実測(SX194・SF107)

完掘全景写真撮影、造構実測

10月13日～17日 遺構実測

器材撤収、現地調査終了

第3節 基本土層

基本土層は次のとおりである。

I層：暗灰褐色土層（径数cmの礫を多く含む。盛土）

II層：灰褐色土層（粘性なく、縮まりなし。表土）

III層：黒褐色土層（粘性があり、固く縮まっている。径数mm～2cmの小礫を多く含んでいる。遺物包含層）

IV層：黄褐色土層（粘性があり、固く縮まっている。径数mmの小礫を含む。基盤層）

V層：黄褐色砂礫層（礫の径数cm～10数cm。縮まり極めてよし。）

I層は表土の上に盛られた土で、道路部分にあたる長さ26mの範囲にのみ見られ、畑地として使用されていたところには見られない。厚さは30～40cmである。

II層は表土層で耕作土である。厚さ20～40cmであり、下面には溝状の掘り込みが見られる。幅50～70cmで下層を約15cm断面逆台形状掘り込んでいる。約1.8mのほぼ等間隔に並び、調査区西端からA2グリッドにかけての16mの範囲に、南北方向に調査区を横断する形で見られる。畑の耕作の際の畝に伴う溝と思われる。また、調査区東側のA3・A4グリッドでは、III層遺物包含層を掘り抜きIV層基盤層にまで達する深い溝が2カ所で見られる。断面形は緩やかなU字形で、ともに幅約2mである。ほぼ南北方向に調査区を横断している。

III層は厚さ30～40cmの遺物包含層で、弥生時代～鎌倉時代の遺物を出土している。そのうち大部分は弥生時代後期と古墳時代後期である。しかし、これらは混在しており、調査区の土層断面観察の結果でも包含層を分層することはできなかった。

IV層は上面が遺構検出面である。表土層からこの面までの深さは50～70cmである。1カ所で下層まで掘り抜いたが、深さ約60cmでV層の地山砂礫層に達した。

第IV章 調査の成果

第1節 遺構

今回の調査で検出された遺構は、全部で187である。120m²という面積から考えると比較的密度が高いといえる。187の遺構のうち、172という大部分はピットである。これらのピットによって掘立柱建物跡1を認定した。他に土坑13、土器集中箇所1、焼土1が検出された。

1 土坑

検出された土坑は全部で13である。長径80cm以上と、ピットに比べて大型のものを土坑とした。平面形は梢円形を呈するものと、円形のものがある。遺物を比較的まとまって出土した土坑もある。

SF26（第4図）

長径1.7m短径1.0mの梢円形を呈する。検出面からの深さは約25cmで、断面形は緩やかな逆台形を呈している。

弥生土器と土器片の破片を比較的多く出土している。これらは底面からの出土ではなく、底面から15~20cm浮いた状態での出土である。また、径10cm前後の4つの礫を出土しているが、これらも土器片と同様に底面から浮いた状態である。

4つのピットと重なっているが、土層断面の観察によると、ピットSP63がこの土坑より新しく掘られており、また、隣接するピットSP30も土坑より新しいという所見であった。土坑の覆土とピットの覆土がほとんど同じため、平面的には確認できなかったが、いずれのピットもこの土坑より新しいと考えられる。

SF107（第4図）

径1.5mのほぼ円形である。北端は調査区外となる。検出面からの深さは約26cmで、断面形は緩やかな逆台形である。

比較的まとまった状態で土器片が出土している。底面から15~25cm浮いた位置からの出土である。また、径10cmの礫が土器片と同じレベルに見られた。

ピットとの新旧関係は明確にはできなかった。

SF10（第5図）

径0.8mのほぼ円形を呈する。検出面からの深さは約15cmで、断面形は緩やかなU字形である。土器片を約50点出土した。図示したのはその一部であるが、いずれも弥生土器の破片で、底面より約10cmかそれ以上浮いた状態で出土している。

ピットと重複しているが、新旧関係はわからなかった。

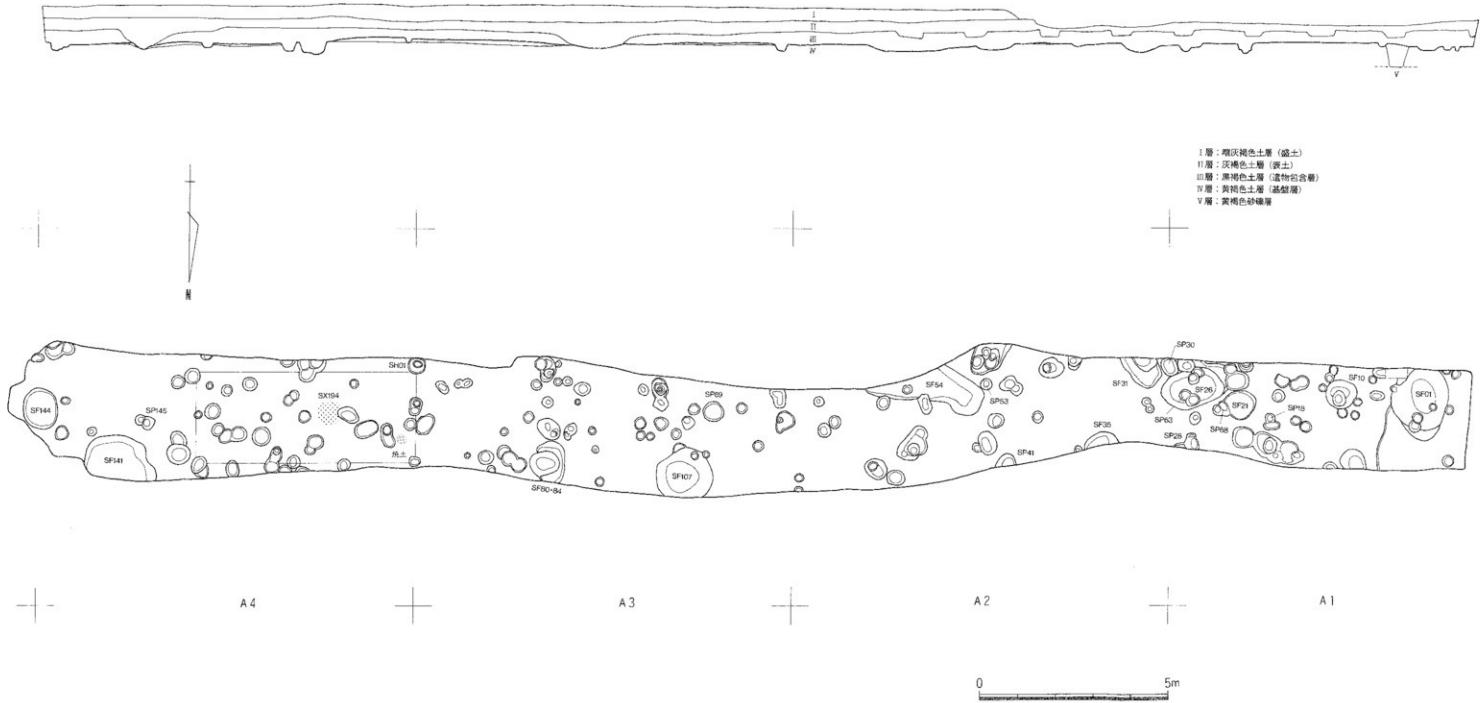
SF01（第6図）

南端が調査区外へ延びるため、長径は推定で約2m、短径は1.5mの梢円形である。検出面からの深さは約32cmで、断面形は緩やかなU字形を呈する。覆土は黒褐色で、遺物包含層(III層)に比べて径数mm~1cmの礫を多く含んでいる。主軸方位は、N-1°-Eとほぼ南北方向である。

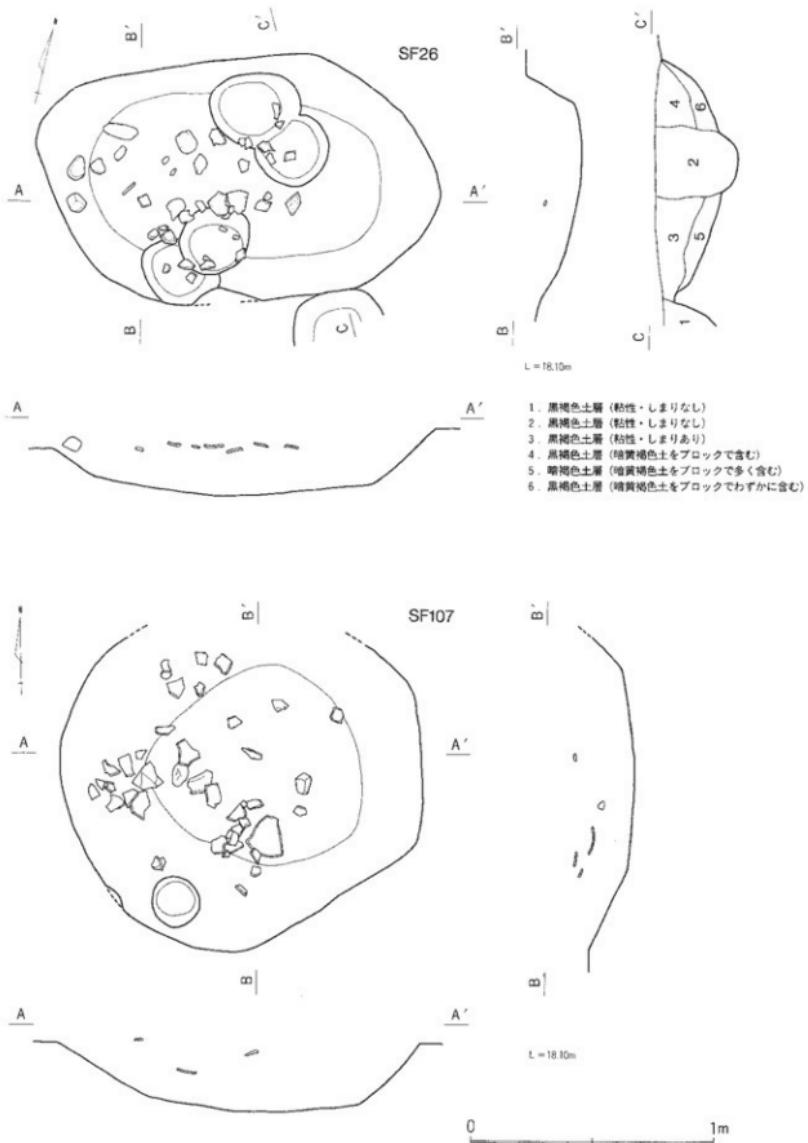
300片以上の土器片を出土したが、細片が多くまとった状態での出土、あるいは底面からの出土は見られなかった。時期が判別できるものはほとんどが弥生時代後期で、中期後半のものをわずかに含んでいる。

また、5つのピットと重複しているが、新旧関係は確認できなかった。

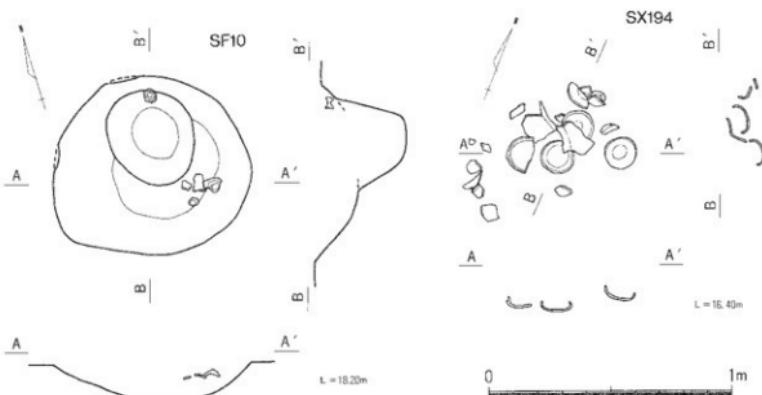
SF64（第6図）



第3図 調査区全体図・土層図



第4図 土坑SF26、SF107実測図



第5図 土坑SF10、土器集中箇所SX194実測図

調査区外へ延び、長径は0.9m以上である。短径は0.8mで楕円形と推定される。断面は底面が平坦な逆台形を呈する。

3つのピットと重複しているが、新旧関係は確認できなかった。土坑内からは遺物は出土しなかったが、ピット内から弥生土器が出土しており、これらは本來この土坑の覆土に含まれるものかもしれない。SF54（第6図）

調査区外へ延びるが、遺構の端部の様相を呈しているため、長さ約3.2mと推定される。幅は1.0m以上である。検出面からの深さは約12cmと浅く、断面は緩やかなU字形である。覆土は黒褐色で径数mmの躊躇を含む。粘性・締まり共にあまりない。覆土中より約140点の土器片を出土したが、ほとんどは細片であった。弥生土器と思われる。また、3つのピットと重なっているが、新旧関係はわからなかった。

SF141（第6図）

区外へ延びるため明確ではないが、平面形は推定約2.0mのほぼ円形である。検出面からの深さは約10cmと浅く、断面は逆台形を呈している。底面が北に向かって傾斜しているため、南北方向に長い形になる可能性もある。覆土は黒褐色土で締まりはあまりよくない。覆土中から約20点の弥生土器片を出土している。

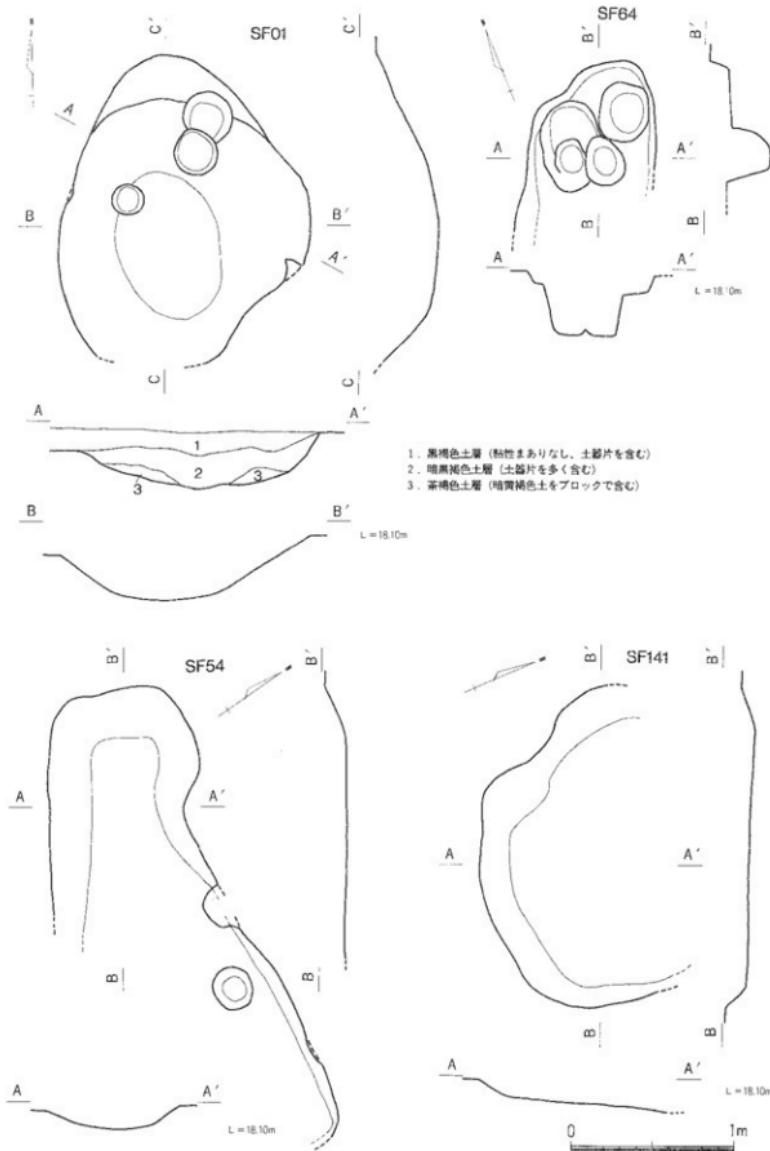
SF80・84（第7図）

2つの土坑が重なって検出された。SF80は楕円形で、主軸方向が区外へもう少し延びる。長径は推定で1.2m、短径もSF84と重なっているため推定であるが、0.7mである。検出面からの深さは7cmと浅い。断面形は逆台形を呈する。主軸方位はN-4°-Eであり、ほぼ南北方向に長い土坑である。SF84は長径0.8m、短径0.6mの楕円形で、検出面からの深さは22cmである。断面形は逆台形を呈する。

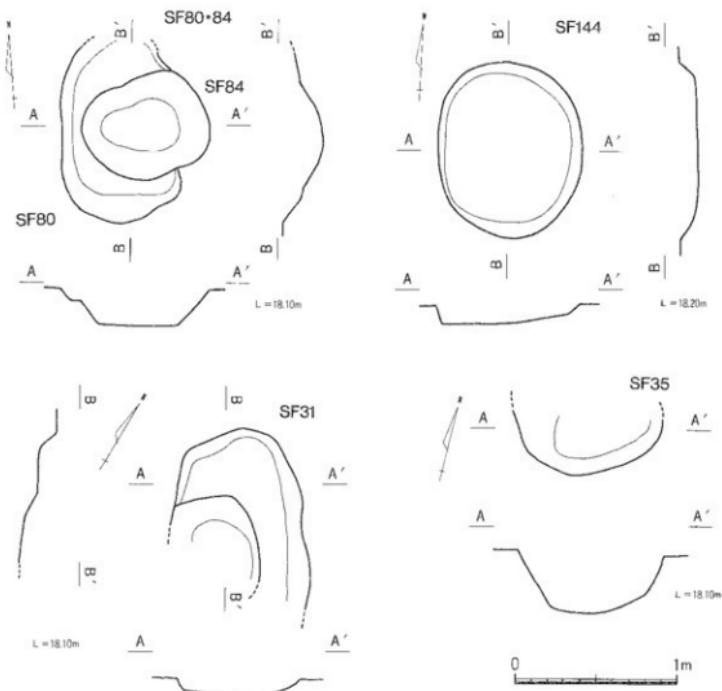
2つの土坑の新旧関係についてであるが、平面では確認できなかったが、土層断面観察の結果、SF80よりSF84が新しいという所見を得た。覆土は共に黒褐色土であるが、締まりがSF84に比べSF80の方がよい。出土遺物は弥生土器片約50点である。

SF144（第7図）

長径1.1m、短径0.9mの楕円形である。検出面からの深さは11cmで、断面形は緩やかな逆台形である。主軸方位はN-6°-Wで、長軸方向はほぼ南北方向である。覆土は黒褐色土で締まりはあまりよくない。



第6図 土坑SF01、SF64、SF54、SF141実測図



第7図 土坑SF80+84、SF144、SF31、SF35実測図

弥生土器片が1点だけ出土した。

SF21

径0.8mのほぼ円形を呈する。検出面からの深さは約6cmと極めて浅い。断面形は緩やかな逆台形である。弥生土器片5点を底面付近から出土している。また、ピットSP68と切り合うが、覆土の違いが見られず、新旧関係は確認できなかった。

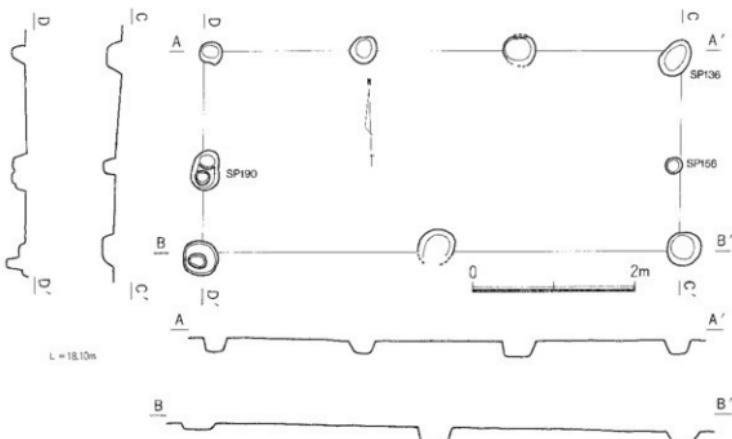
SF31 (第7図)

調査区外へ延びるため明確なことは言えないが、平面形は梢円形と思われる。長径1.2m以上で、短径は0.8mである。検出面からの深さは12cmで、断面形は逆台形を呈する。弥生土器片を約40点出土している。また、内部に深さ約10cmの掘り込みが見られる。覆土が同じであるため平面的には確認できなかつたが、別遺構のピットの可能性もある。

SF35 (第7図)

北半部は調査区外である。径0.9m、深さ40cmと深く底面はV層砂礫層に達している。また、底面は西側が低くなっている。覆土は暗黄褐色土をブロックで含む黒褐色土で、比較的縮まりはよい。弥生土器片を約40点出土している。

以上13基の土坑について述べたが、ピットと重複しているものが多い。覆土による違いはほとんど分



第8図 堀立柱建物跡SH01実測図

からなかったが、一部の遺構では、ピットの方が新しいという調査所見である。年代は出土遺物として弥生中期後半～後期の土器が見られることから、その頃が考えられる。

2 土器集中箇所SX194（第5図）

A 4 グリッドで、西端から 2 m 東のところからまとまった土器が出土した。掘り込みは見られなかつたが、完形及び完形に近い須恵器・土師器が集中して出土したため、遺構として扱った。

土器は若干のレベル差はあるがほぼ同一面であり、口を上に向けて置いた状態であることから、原位置をとどめていると思われるものも數点見られる。完形の土師器壺 3 点の他に、欠損した須恵器壺 1 点に土師器甕・壺など破片を含めて約 30 点である。

出土レベルは、遺構検出面である IV 層黄褐色土層上面より約 15cm 上からであった。この SX194 の 1.5m 西のほぼ同一レベルで焼土を検出している。そこで土器集中箇所 SX194 及び焼土の検出レベルを床面とする堅穴住居跡を検討してみたが、確認することはできなかった。

3 堀立柱建物跡SH01（第8図）

古墳時代の堀立柱建物跡を 1 棟認定した。堀立柱建物跡 SH01 は A-3 グリッドと A-4 グリッドの境から A-4 グリッドかけて位置する。桁行 3 間 5.85m、梁行 2 間 2.50m である。桁行は北列が 3 間、南列が 2 間である。柱間は桁方向が 1.95m の等間隔である。梁方向は 1.4m と 1.1m である。梁行方位は N-1°-W とほぼ南北方向である。

柱穴は SP136、SP190 が楕円形で他は円形を呈する。SP190 は円形のピットが 2 つ重なったものかもしれない。径は 30~48cm であり、今回の調査で検出されたピットの中では中型から大型に属する。SP156 は径 20cm と小型である。柱穴の深さは検出面から 15~25cm であり、今回の調査では中位に属する。

建物跡の認定については、調査範囲が幅約 3 m、面積 120m² という狭い範囲のうえに、検出されたピットが 172 と多数であったため、困難であった。この中で以前の調査結果を基に 1 棟だけを認定した。第 1 次調査で検出された堀立柱建物群は棟方向がほぼ南北方向である。また、第二次調査では、ピットのうち径 30cm 内外で深さ 20cm 程度と深いものと、一辺 30cm の方形の掘り方のものを柱穴としている。そこ

で、建物跡はピットのうち径30cm以上深さ15cm以上のものを用いて、つまり、今回の調査では浅いあるいは小さい部類に属するものを除いたピットによって、南北方向の建物を想定して、SH01を考えてみた。

4 ピット

ピットは全部で172検出されている。円形のものがほとんどで、方形のものは見られない。大きさについては径40cm以上のものを大型、径30~40cmを中型、径30cm以下を小型としたが、それぞれの割合は大型32%、中型40%、小型28%である。検出面からの深さは15cm以下、15~25cm、25cm以上に分けたが、それぞれ38%、35%、27%である。ピットの覆土は黒褐色土であり、覆土による違いは観察できなかった。

次にピットの年代についてであるが、今回の調査で出土した遺物は、そのほとんど全てが弥生土器と古墳時代の須恵器・土師器である。そして全ピットのうち半数以上から土器を出土しているが、そのうち古墳時代の土器を含むものが30%近くある。従って古墳時代のピットが含まれることは確実である。弥生時代のピットが含まれる可能性についてであるが、弥生土器のみを出土しているものも半数近くあることから考えることができる。しかし、ピット内の弥生土器はほとんどが細片であり後世の混入とも考えられること、ピットの覆土に時期差を示すような違いが見られないこと、弥生時代の土坑と重なるピットが多く見られて土坑とは時期差があるといえることから、ピットは全て古墳時代と一応考えたい。SP145とSP53からは、底面より比較的大きな弥生土器の破片（第9図10・2）が出土しており（図版6-2・3）、弥生時代のピットが含まれる可能性を残しているが、SP145は径35cmの円形で深さ15cmと比較的浅く、SP53は径31cmの円形で深さ35cmと深い。径はどちらも検出した中では平均的であり、今回の調査地点においてはピットの大きさや深さと時期差の関係は認められないといえる。

第2節 遺 物

1 弥生土器（第9図、第10図）

(1) 壺

1は細頸壺の頸部である。比較的大型で、口縁部は外反している。頸部下には文様が見られる。2段のLR繩文とその下にRL繩文が施文されている。LR繩文の部分には施文後、櫛刺穴による3条の沈線文が施されている。頭部及び口縁部内面は横方向にミガキ調整されている。また、口縁部はハケ調整され、頸部内面にはしぶり目が見られる。

2は体部上半から下半にかけてである。体部下半で屈折し、明瞭に稜をもつ器形である。体部の張りは大きく、最大径は中位にくる。肩部には棒状工具による刺突羽状文が施されている。調整は上半が縱位、斜位のハケ目で、下半が横位のミガキである。

3は底部である。横位のミガキと底面付近はハケ目が見られる。2のような器形の底部である。

11~24は口縁部破片の拓影図である。11~19・21・22は折り返し口縁で、外反する器形である。

11は口唇部に1つの棒状浮文が貼付されており、突起状を呈している。摩滅により文様・調整は不明である。

12は口唇部に棒状浮文を貼付している。内面には棒状工具による波状文を施文をしている。

13は口縁内面に櫛描文が施されている。摩滅のため明確にできなかつたが、端部付近に扇状文、そしてその内側に刺突羽状文が施文されている。外面はハケ調整である。

14は口唇部に棒状浮文が密に、そして丁寧に貼付されている。口縁部内面には櫛描波状文が施文されている。

15は口唇部に櫛状工具により粗雑な刻目が施されている。内面にはLRの結節繩文が2段施文されている。

16は口縁端部付近がほぼ水平に外反し、口唇部には刻目が施されている。内面は無節Rの結節繩文が施文され、外面はハケ調整のままである。

17の口唇部はヘラ状工具により刻目が施されている。口縁内面には円形浮文が貼付されている。また、摩滅のため拓影図では明確にできなかったが、LRの結節繩文が施文されているようである。

18の口唇部は櫛状工具を用いて斜めの連続刺突列が施され、浅い刻目状を呈している。内面は横位の、外面は縦位のハケ調整である。

21は大型壺である。厚手の口唇部には櫛状工具の刺突により、斜格子文が施されている。内面は櫛描波状文が3段施されているが、崩れており丁寧とはいえない。

22は口縁端部である。かなり肥厚させた口唇部に櫛状工具を刺突し、斜格子文を施している。

19はやや内湾しながら聞く器形である。このため折り返し口縁であるが、他の土器の口唇部にあたる、口縁端の突帯部分に棒状浮文が貼付されている。また、口縁端部の内面、つまり口唇部にはLR繩文が施文されている。内面は横方向のハケ調整後、ナデ調整されている。

20と23は、内湾して受け口状を呈する複合口縁である。

20は端部に細長い棒状浮文が貼付されている。また、内面に浮文が貼付されているが、円形のものを摘んで棒状にしている。

23は外面の屈折部分に円形浮文が3つ並んで貼付されている。また、口唇部にはLR繩文が施文されている。調整は外面が縦方向のハケ目で、内面はミガキである。

24は内湾しながら聞く単純口縁で、口唇部には節の細かいLR繩文が施文されている。ミガキ調整されており、内面は丹塗りされている。

25~36・39は肩部の文様の拓影図である。

29は摩滅により明確にできなかったが、櫛状工具による羽状文、その下にアーチ状の円弧文、そして塵状文が施されている。

26は櫛描文である。2条の横線文が施され、その間に波状文、下に扁状文が施文されている。

30は斜め方向の櫛描文を交差させて格子目文を構成している。

31は薄い櫛状工具によって、方向の異なる斜めの連続刺突が交互に3段に施され、刺突羽状文を構成している。そして、その下に円弧文を配している。

27は櫛描横線文の下に波状文を配している。

28は櫛描波状文が施文されている。波状が流れ、やや崩れた形状である。

32は頸部と肩部との境で段がつき、肩部には櫛描羽状文が施されている。また、段境には列状に棒状浮文が貼付されている。

33は櫛状工具により1条の刺突沈線を施し、その下におそらく羽状文になると思われる連続刺突文が施されている。刺突沈線より上は丁寧にミガキ調整されている。

25は櫛状工具により横線を施し、一部を縦位の線によって区切っている。いわゆる丁字文である。

33は肩部に1条の沈線を巡らせ、その下に羽状文を配している。施文工具は、沈線はヘラで、羽状文は櫛状工具である。羽状文の間隔は狭く、櫛刺突ではなく櫛描きである。

36はヘラ描による5条の沈線の一部を縦に区切って文様としている。流水文を模した構成と思われる。

34は肩部に円形浮文が貼付されている。

39は体部上半から中位にかけてである。横位のLR繩文が全面に施されている。

(2) 壺

4は口縁部から体部上半である。口縁部がくの字に屈曲して外に開く器形である。体部は球形を呈するようである。口唇部は面取りされ、刻目が施されている。器面にはハケ調整が施されているようであるが、摩滅のため不明瞭である。

5は口縁部から体部上半にかけてある。頸部で屈曲し、口縁部がくの字になる器形である。口唇部は面取りされ、刻目が施されている。体部は最大径が中位にくる球形を呈するようである。調整は外面が斜め方向のハケ、内面は口縁部が横位のハケ、体部はナデである。

6は台付壺の台部である。調整は外面が縱方向、内面が斜め方向のハケ目である。台部内面の端部には折り返しが見られない。

37は口縁端部を折り返し、短く厚くしている。端部には櫛状工具による刻目が施されている。外面及び口縁部内面はハケ調整されている。また、口縁部下に刺突点が見られる。

38は体部の破片である。ハケ調整後にヘラ描きにより斜めの平行線が引かれているが、羽状文を構成するものと思われる。

(3) 高杯

7は坏部から接合部である。接合部に4条の櫛刺尖沈線文が施されている。

10は脚部である。脚据部で段がつき広がる器形である。そして、据部にはLR繩文が施されている。脚上部は縦位のミガキ調整である。また、内面はナデ調整が施されている。

8は坏部と脚部の接合部である。櫛刺突による3条の沈線文が施文されている。

9は接合部から脚部にかけてあるが、脚端部は欠損している。脚部は長く、据部で段がつき広がる。接合部には、櫛刺突による羽状文が2段にわたって施文されている。脚部は縦方向のミガキ調整で仕上げられている。

40は口縁部が水平近くまで開き、鉢状を呈する器形の口縁部の破片である。端部を折り返し、口唇部に櫛状工具による刻目を施している。調整は外面がハケ目で、内面は丁寧なミガキである。

41は40と同様に鉢状口縁の部分である。端部を折り返し、口唇部に刻目を施している。調整は内外面ともにハケ調整である。

(4) 鉢

42～44は鉢の口縁部である。口縁部は内傾し、体部との境で屈曲する器形である。口縁部には横位のLR繩文が施文されている。44は2段が重なるように施文されている。体部と内面は丁寧にミガキ調整されている。

2 須恵器（第11図）

須恵器は坏蓋、坏身、高杯、壺、罐、平瓶、長頸瓶などが出土している。図示した土器について器種ごとに個々に特徴を述べるとともに、器種別の個体数を示した。個体数は口縁部破片に、その器種に特徴的な部位の数を加えて算定した。

(I) 坏蓋

坏蓋は14点出土している。内2点は口縁部を欠く、摘み部分を含む破片である。4点を図示した。

46は口径13.5cm、器高3.7cmである。不明瞭ではあるが、天井部と口縁部の境に段を付けて稜を作っている。口縁部は稜の部分から直立気味に作られている。また、口唇部は内側に斜めに整形している。

45は推定径15.7cmと大型である。体部と口縁部の境に稜を設けている。稜の下に沈線を巡らせることで稜を明確に作り出している。口縁部は稜の部分からほぼ直立して作られている。口唇部は内側を斜めに整形している。

47は口径12.4cmである。口縁部と体部を区画する稜は見られない。口唇部は手を加えることなく、丸

く終わっている。器形は体部から口縁部にかけてそのまま弧を描いて続く。口縁部内面に1条の沈線を巡らせており。天井部は整形後に粘土を貼付しナデしており、内面には焼き膨れが見られる。

54は径11.8cm、かえり付きで扁平な宝珠形の摘みをもつ。かえりは口縁部端より突出している。かえりはほぼ垂直に作られている。自然釉がほぼ全面に見られる。

(2) 坏身

坏身は19点出土している。大部分は口縁部破片であるが、底部付近の破片を1点含めた。8点を図示した。

48は最大径16.7cm、器高6.5cmと大型である。受け部からの立ち上がりは内傾気味で2cmと長い。端部はやや丸く作られ、口唇部は内面が斜めに整形され沈線状を呈している。底部は底面の径5cmの範囲は平らであるが、全体的に丸みを帯びており、体部上位まで回転ヘラ削り調整が施されている。また、受け部の直下は強いナデによって、幅広の沈線状に窪んでいる。

49は推定最大径14.6cm、推定高4.2cmである。受け部からの立ち上がりは体部に内傾して付けられ、上半部は直立している。そして端部を丸く收めている。体部の器形は直線的である。

50は推定最大径15.2cmである。受け部からの立ち上がりは直線的に内傾し、端部を丸く收めている。体部の器形は直線的である。

51は推定最大径13.2cmである。受け部からの立ち上がりはわずかに体部に内傾して付けられ、端部付近の内面は直立になるように整形されている。欠損のため底部については不明であるが、体部は直線的である。また、受け部の下に沈線が1条巡っている。

52は最大径12.0cm、推定高3.9cmである。受け部からの立ち上がりは体部に内傾して付けられ、端部は直立気味に作っている。体部は緩やかな弧を描いている。

55は無台の坏身である。口径11.0cm、器高3.4cmである。器形は全体に半球形を呈しつつも、底面は平ら気味である。口縁部はやや外傾し、端部付近は内外面から押さえられてやや薄くなっている。底面はヘラ削り調整されている。

53は推定最大径11.4cmと小振りである。受け部からの立ち上がりは体部から外反して付けられ、短く、受け部よりわずかに高いだけである。

56は有台坏身の底部である。器形は口縁部が開いた箱形を呈する。底部から体部へは明確な棱となつて屈折し、外傾している。高台は外反気味に開いている。

(3) 高环

口縁部の残る破片から高环といえるものはなかった。脚部の破片と坏底部から接合部にかけての破片の2点が出土している。図示できなかったが、脚部の破片は長脚二段透かしのもので、他の1点は透かしをもたない高环のものである。

(4) 瓢

瓢は17点出土している。口縁部破片の他に、波状文の施された頸部片6点を個体数に含めた。拓影図を4点(62~65)示した。

(5) 線

線は3点出土している。口縁部破片1点の他に注口部分と体部の破片各1点を加えた。実測図2点を掲載した。

60は口縁部破片である。頸部に1条の断面三角形の突帯を巡らせて段状にしている。そして、この下に波状文を配している。口縁部が短く頸部径が大きい線の破片と思われる。

61は注口部である。粘土を貼付し、成形後に穿孔している。

他に線と思われる体部中位から下半の破片が出土している。中位に2条の沈線によって区画を設け、

列点文を施している。

(6) 瓶類

平瓶、横瓶、長頸瓶などの破片11点が出土している。

平瓶は、図化できなかったが、頸部から肩部にかけての破片が2点出土している。巻き上げ成形後、円形に残った開口部を塞ぎ、その脇に穴を穿って口頸部を取り付けている。また、成形後の開口部を塞いだ破片はもう1点出土している。口頸部の取り付けは見られず、提瓶と考えられる。

58は横瓶の口頸部の破片である。頸部は外反し、口縁端部を垂下させている。口縁部直下には断面三角形の突帯を巡らせている。肩部の一部が残っているが、そのノタ目の方向が口頸部の成形のノタ目の方向と直交するため、フ拉斯コ形などが考えられる。

66は長頸瓶などの瓶類の口縁部破片である。口縁部は断面台形を呈するように厚く作られている。この直下には、波状文が狭い間隔で丁寧に施文されている。内面と頸部から下は緑色の自然釉がたっぷりとかかっている。

(7) 坩

57は短頸坩で、推定口径11.2cmである。口縁部はわずかに外反しながら立ち上がる。内面は端部付近を薄くし、段を付けている。頸部下の最大径の部分に、1条の沈線を巡らせている。

3 土師器（第12図）

坏、高坏、模倣坏蓋、小型壺、甕、櫃が出土している。

(1) 坏

口径13cm内外で、器高は5cm前後とあまり深くない。口縁部が内湾する器形である。器面調整は摩減のためほとんど観察できなかった。

67は口径13.4cm、器高4.9cmで、内湾する口縁である。底部からやや直線的に立ち上がり、湾曲して口縁部となる。

68は口径12.6cm、器高5.5cmとやや深めである。底部から湾曲しながら口縁部となる器形である。

70は口径12.8cm、器高4.9cmで、底部から緩やかに湾曲しながら内湾する口縁部となる。

71は推定口径12.4cm、推定高4.9cmで、底部から内湾して立ち上がり、そのまま口縁部となる。

69は口径12.0cm、推定高4.0cmで、底部から湾曲しながら立ち上がり、口縁部は屈曲気味にほぼ直立する。口縁部はヨコナデ調整されている。

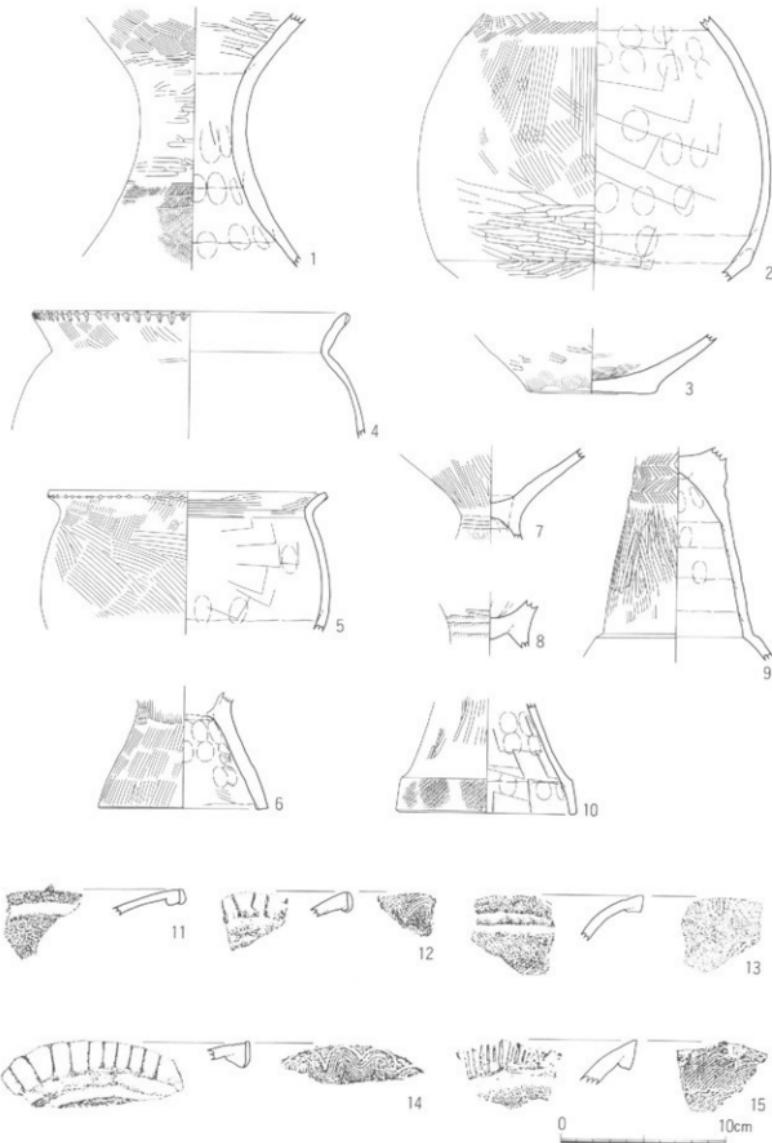
(2) 高坏

古式土師器が1点見られる。73は坏部の口径11.8cm、器高5.0cmである。坏部は底部と体部の境で稜を作って屈折し、体部は内湾しながら開いて口縁部となる。脚部は透かし部分の上端付近までしか残存していない。三方に透かしが見られる。脚部は八の字に開き、裾部で外側に折れてさらに開く器形と思われる。

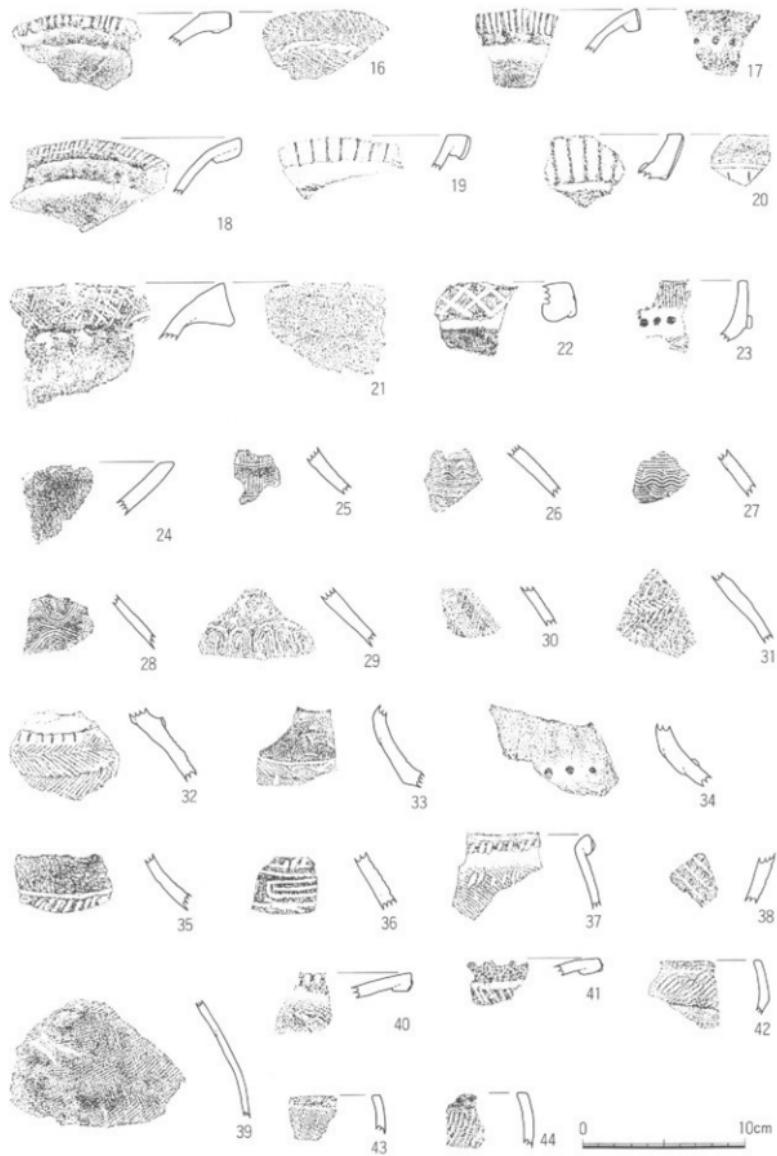
72は口径13.5cm、器高8.8cmの短脚の高坏である。坏部は平坦な底部から湾曲して立ち上がり、口縁部はほぼ直線的に開く。口縁端部付近の内面は薄く成形されているため、端部が外傾しているように見える。脚部は4cmと低く、接合部付近は直立で、湾曲しながら裾部で開く。裾端部付近に1条の浅い沈線が施されている。坏部と脚部の接合の仕方は、坏底部に突起を作り、脚上部を差し込み、突起部分を脚内面からナデ整形により平坦にする方法である。このため底部はやや厚くなっている。

78は坏底部から脚部にかけてである。脚部は細く開きが弱いが、裾部で大きく屈曲してほぼ水平に広がる。坏部は底部がわずかに残っているのみであるが、ほぼ水平に開いており、体部との境で屈曲して立ち上がる器形と思われる。脚内部は上半近くまで中空になっている。

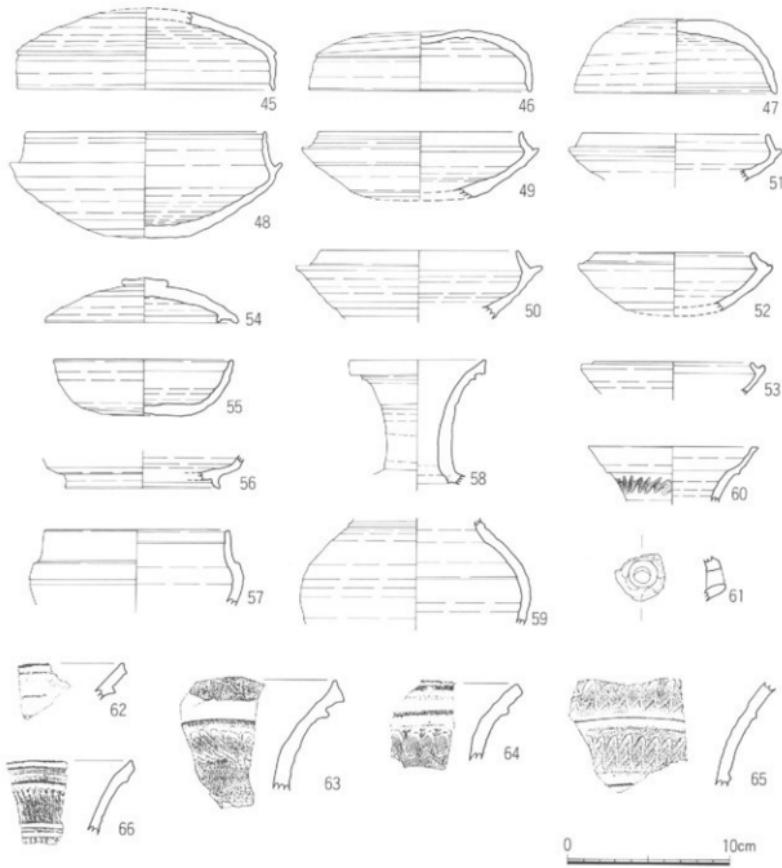
74は脚部である。脚は細くて開きは弱く、裾部で大きく屈曲して横に広がる。



第9図 弥生土器実測図・拓影図(1)



第10図 弥生土器拓影図(2)



第11図 須恵器実測図・拓影図

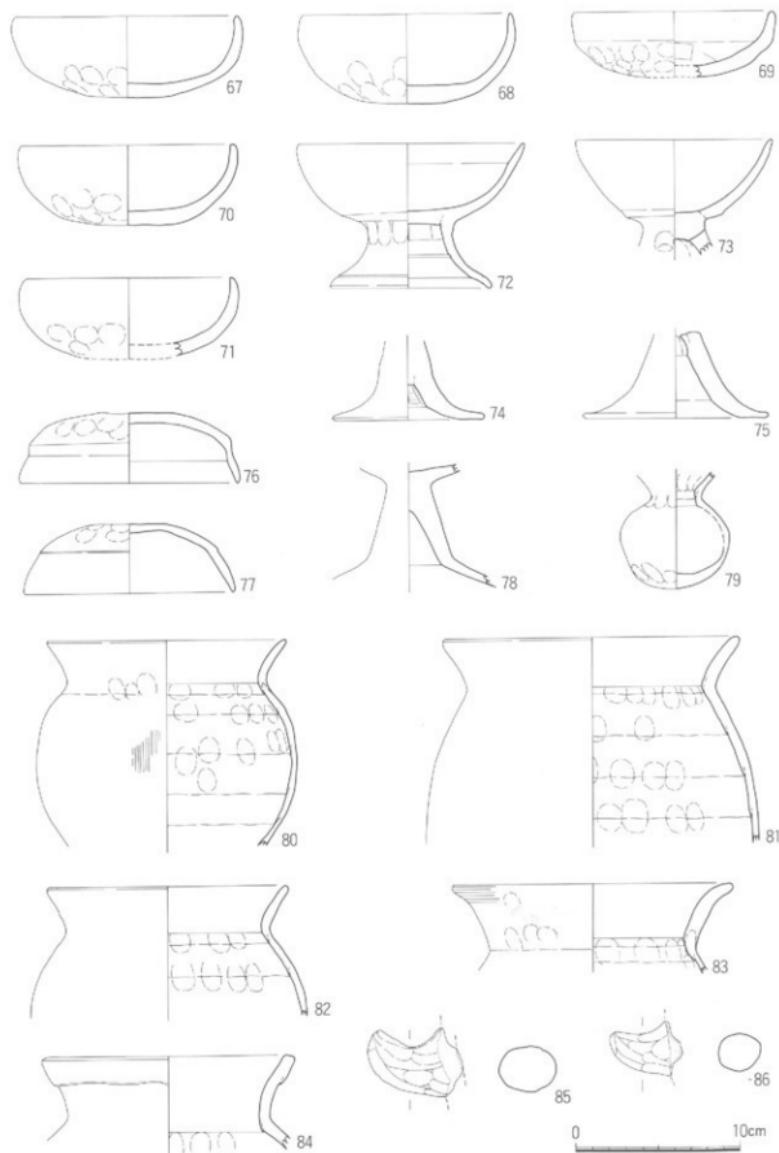
75も脚部で、八の字状に湾曲しながら開き、裾部でさらに大きく開く。74、78に比べて脚は径も大きく、開きも強い。

(3) 模倣坏

76・77は須恵器の器形を模した模倣坏の蓋である。76は口径13.2cmと大型で、体部と口縁部の境に沈線を伴う稜を作り出している。77は推定口径12.8cmで76と同様に体部と口縁部の境に稜を意識して作っている。

(4) 小型壺

79は体部最大径6.7cmと小型である。口縁部は頸部からわずかに内湾しながら外に開いて立ち上がっている。端部は残存していない。長めの口縁部のようである。底部は丸底で体部はやや扁平な球形である。



第12図 土器実測図

(5) 壺

82は口縁部から体部上半である。頸部で屈曲し、口縁部は外反氣味にくの字に開く。口縁端部はおそらくヨコナデ調整によるが丸くなっている。器壁は薄い。

80は推定口径14.4cmとそれほど大きくなくて器壁も薄い。器形は最大径が体部中位になる球形で、口縁部はくの字に屈曲し外反する。端部は丸くなっており、ヨコナデ調整によるものと思われる。

81は推定口径17.9cmの口縁部から体部上半である。80と同様にくの字口縁であるが、頸部で明確に屈曲している。

83は頸部でくの字に屈曲し、口縁部は外に開く。端部付近はさらに外反して、ヨコナデ調整により丸く收められている。口縁部は体部に比べ肥厚されている。

84は頸部で屈曲し、口縁部は外反しながらくの字に開く。口縁端部付近は幅1cmにわたって折り返されている。口唇部は面取りされた後に、ヨコナデ調整されているようである。

(6) 把手

85・86は壺のものと思われる把手である。把手の基部は突起が付いており、体部に差し込む形態になっている。断面形は85が楕円形、86が円形である。

4 出土土器の年代

出土した土器は、弥生・古墳時代を主体とし、平安・鎌倉時代のものがわずかである。

弥生土器は中期後半から後期にかけてのものである。中期後半（白岩式）の土器としては、1の細頸壺や柳構横線文を縱に区画する文様の25がある。他に36や38が同時期である。

後期（菊川式）の土器は出土した弥生土器の大部分を占める。11から18・21・22は壺の口縁部で折返し口縁である。2は肩部が張る器形であり、体部下半に明瞭な稜が見られることから、菊川式でも新しい時期のものである。壺は4・5のように、口縁端部に刻目の施されたものが見られる。高杯は坪部と脚部との接合部に、7・8のように柳刺突横線文を施す古い時期のものと、9のように数段の柳刺突羽状文を施す新しい時期のものと両方が見られる。

古墳時代の須恵器については、环は45・48が出土した中では最も古く、TK-10型式に比定される。他に47などTK-209型式のものや、52・53のように最大径が11cm台と小振りで7世紀前半に位置づけられるもの、54・55のように蓋にかえりと扁平な宝珠状の摘みが付く、7世紀後半のものが見られる。56は高台が付き、同じく7世紀後半か、あるいは8世紀のものである。

62・64の壺はTK-208型式と5世紀に位置づけられそうである。60の壺や66の長頸瓶は5世紀まで遡るものであろうか。このように須恵器は6世紀中頃から7世紀あるいは8世紀に至るまでのもの他、一部は5世紀のものも見られる。

土師器は73の高杯が古式土師器である他、78の高杯が5世紀に位置づけられる。また、67・68・70・71の环は、器形からそして48の須恵器环身と共に共存していることから6世紀中葉頃といえる。

他に図示できなかったが、灰釉陶器、山茶碗の破片が5点ずつ、12世紀頃に位置づけられる壺の破片3点出土している。

第V章　まとめ

今回の発掘調査によって、遺構としては弥生時代の土坑13、古墳時代の掘立柱建物跡1棟を含むビット172と土器集中箇所1が検出された。遺物としては、弥生時代後期と古墳時代後期を中心に、弥生時代中期後半から古墳時代後期にかけての土器が出土した。今回の調査結果をこれまでに実施された調査の成果とを結びつけて考えてみたい。

掛之上遺跡の発掘調査は、これまでに袋井市教育委員会によって3回実施されている。その成果によると、弥生時代については方形周溝墓が第1次調査で14基、第2次調査・第3次調査でそれぞれ1基が検出されている。第1次調査では群として密集した状態で検出されており、この地点は墓域といえる。第2次調査では方形周溝墓の他に掘立柱建物跡1棟が検出されており、墓域と居住域の境界あるいは混在する地域と考えることができる。第3次調査地点も墓域と考えられる。これらの地点はいずれも遺跡の西側部分に当たり、この3地点を結ぶ遺跡西側の広い範囲に方形周溝墓が分布していると想定されている（袋井市教育委員会 1990）。また、今回の調査開始以前に袋井市教育委員会によって、周辺の広い範囲が試掘調査され、今回の調査地点付近のトレンチからビットが確認されており、今回の発掘調査によって、建物跡あるいは方形周溝墓や土器棺墓が検出される可能性が指摘されていた。今回の調査地点は第1次調査地点の東側にあたり、方形周溝墓群が広がって墓域に含まれるのか、それとも竪穴住居跡などの建物跡が検出されて居住域になるのかということが課題であった。

古墳時代については今までの調査の中で、古墳時代後期の掘立柱建物跡が検出されている。第1次調査地点では総柱で規格性をもった群として検出されており、第3次調査地点では、柱穴の一辺が1.2m以上の大型の建物跡が検出されている。そこで、今回の調査地点においても大型や総柱を含む掘立柱建物跡が検出されるかどうかが注目された。

古墳時代の掛之上遺跡の性格については、隣接する大門遺跡などを統括する有力者の居館跡に関連する（袋井市 1983）、あるいは大門遺跡の発掘調査が5次にわたって実施される中で、第2次調査では大型掘立柱建物跡が検出され、掛之上遺跡から大門遺跡という広い範囲での大規模な豪族居館関連の遺構かあるいは、奈良時代の官衙遺構群が推定されるようになってきている（袋井市教育委員会 1990）。

今回の調査結果について、まず弥生時代について述べると、明確な方形周溝墓を検出することはできなかった。土坑SF26とSF31、SF64とSF54がそれぞれ直角に配置されており、方形周溝墓の形態を示している。しかし、SF26は長さ1.7mと方形周溝墓の周溝としては短すぎること、SF31・SF64・SF54は調査区外まで延びてその規模が不明であり、特にSF64はほとんど調査区外であることから方形周溝墓と認定することは避け、土坑として扱った。

土坑は全部で13基検出された。年代は、古墳時代のビットと重複する土坑も見られ、ビットより古く位置づけられること、土坑覆土より出土している土器が弥生土器であることから弥生時代といえる。出土土器は、弥生時代中期後半のものをごくわずかに含むが、後期がほとんどである。

次に土坑の性格についてであるが、土坑より出土した土器は破片であり、土器棺墓といえる状況ではない。検出された弥生時代の遺構は土坑のみであり、住居跡などは見られない。さらに、今回の調査地点は、方形周溝墓群の分布する第1次調査地点に隣接する地域であることから、居住域とするよりむしろ墓域の続きとし、これらの土坑を墓と見ることができるのでないか。第2次調査では方形周溝墓とともに土坑が検出され、「墓としての推定が許されるならば」と墓の可能性を示唆している（袋井市教育委員会 1983）。

古墳時代については172のビットが検出されている。幅約3mで面積120cm²という狭い範囲に比べて

柱穴数が多いといえる。そして、このために掘立柱建物の個々の規模・配置の想定が困難であり、1棟を認定したにすぎない。第1次調査で検出された掘立柱建物が南北方向であることを考慮して建物跡を想定した。柱穴の数とその配置から、かなりの棟数の掘立柱建物が立て替えられながら存在したといえる。第3次調査や大門遺跡で見つかっているような大型建物については、柱穴の規模が小さいことから考えられない。また、竪穴住居ではなく掘立柱建物群が想定されるため、一般集落ではなく有力者層の居住域あるいは居館の一部の可能性が高いといえる（袋井市教育委員会 1990）。

遺物に関しては、5世紀に遡る須恵器をわずかではあるが、発掘調査で初めて出土し、掛之上遺跡の資料に追加できたことは大きな成果といえる。

最後になったが、委託者の静岡県袋井土木事務所には調査準備から報告書刊行までの間、御理解と御協力を、袋井市教育委員会の関係者の方々には、資料の提供や助言など多大な協力をいただいた。また、現地調査・資料整理の段階でも、次の方々に指導助言をいただいた。御芳名を記し、深く感謝を申し上げる。

柴田稔、永井義博、松井一明（敬称略）

参考文献

- 後藤建一 1989 「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」 『静岡県の窯業遺跡』 静岡県教育委員会
静岡県 1990 『静岡県史』考古資料編1 考古1
浜松市教育委員会 1990 『伊場遺跡 遺物編5』
袋井市 1983 『袋井市史』通史編
袋井市教育委員会 1975 『狐塚遺跡発掘調査概報』
袋井市教育委員会 1983 『掛の上遺跡II』
袋井市教育委員会 1987 『大門大塚古墳』
袋井市教育委員会 1990 『大門遺跡V—大門I遺跡第5次発掘調査報告書—』

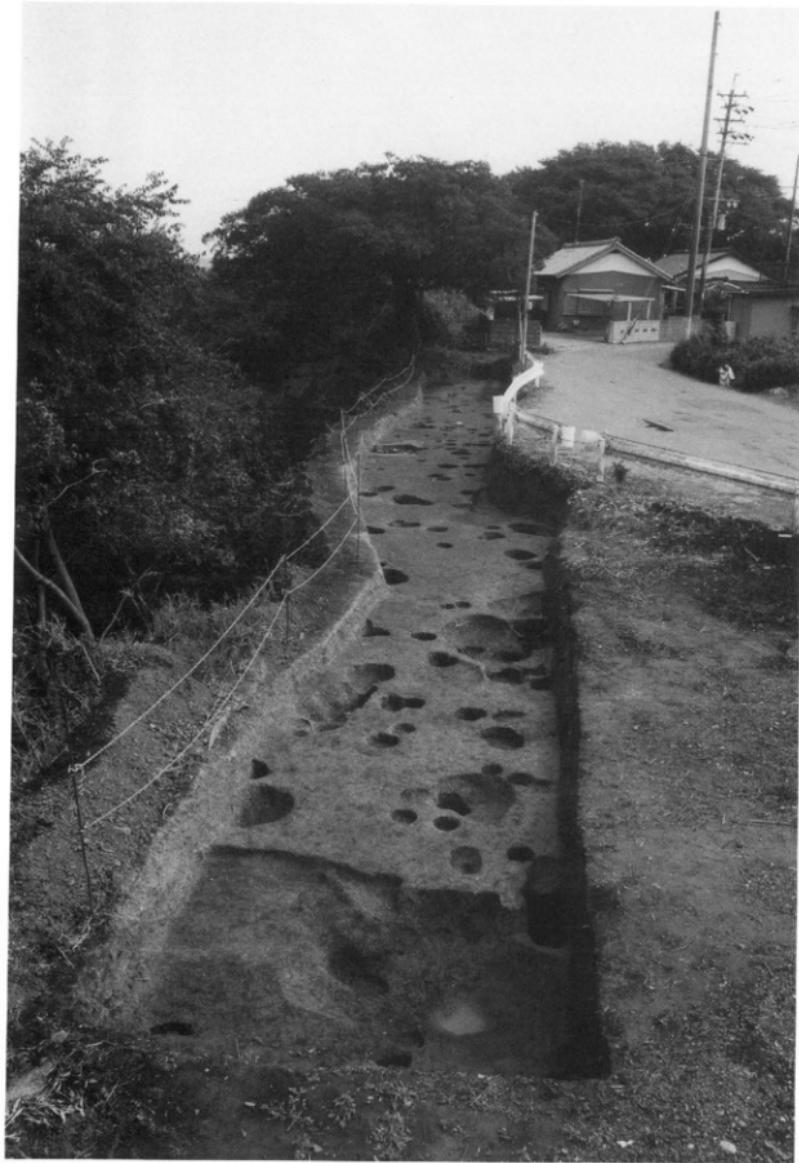
表2 出土土器一覧表1

遺物番号	捕岡番号	國版番号	出土位置	法量(口径・底高・其登cm)	残存部位・残存率	胎土・焼成・色調
1	9	7	SF107		頸部1/3	粗・良好・黄褐色
2	9	7	SP53		体部1/2	やや粗・良好・浅黄褐色
3	9		SF26	7.9	底部1/1	やや粗・良好・灰白色
4	9	10	A-2S	(18.9)	口縁部1/4	粗・良好・浅黄褐色
5	9	10	SF107	(16.9)	口縁部～体上部1/3	密・良好・褐灰色
6	9	10	A-2S		(9.1) 台部1/3	やや粗・良好・淡黄色
7	9	10	SP121		接合部1/1	やや粗・良好・灰黄褐色
8	9	10	A-1S		接合部1/1	やや粗・良好・浅黄褐色
9	9	7	A-2N		接合部1/1	粗・良好・灰白色
10	9	7	SP145	(10.7)	脚部4/5	やや粗・良好・淡黄色
11	9	9	A-2S		口縁部破片	粗・普通・灰白色
12	9	9	A-2S		口縁部破片	密・良好・浅黄褐色
13	9	9	SP18		口縁部破片	やや粗・良好・灰白色
14	9	9	SF35		口縁部破片	密・良好・灰白色
15	9	9	A-2N		口縁部破片	密・良好・にぶい黄褐色
16	10	9	A-2N		口縁部破片	やや粗・良好・明赤灰色
17	10	9	A-1S		口縁部破片	やや粗・良好・浅黄褐色
18	10	9	SP69		口縁部破片	密・普通・浅黄褐色
19	10	9	SF01		口縁部破片	密・良好・浅黄褐色
20	10	9	A-4S		口縁部破片	やや粗・良好・浅黄色
21	10	9	SF26		口縁部破片	粗・良好・灰白色
22	10	9	A-2N		口縁部破片	やや粗・良好・浅黄褐色
23	10	9	A-4S		口縁部破片	密・良好・淡黄色
24	10	9	SP41		口縁部破片	密・普通・橙色
25	10	9	SF01		肩部破片	やや粗・良好・灰白色
26	10	9	A-4S		肩部破片	密・良好・にぶい橙色
27	10	9	A-1S		肩部破片	密・良好・灰黄褐色
28	10	9	SP28		肩部破片	密・良好・灰白色
29	10	9	A-1N		肩部破片	やや粗・良好・橙色
30	10	9	A-3N		肩部破片	やや粗・良好・灰黄色
31	10	9	A-1N		肩部破片	やや粗・良好・淡黄色
32	10	9	A-2S		肩部破片	やや粗・良好・浅黄褐色
33	10	9	A-1S		肩部破片	密・良好・浅黄色
34	10	9	A-2S		頸～肩部破片	密・良好・浅黄色
35	10	9	SF10		肩部破片	やや粗・良好・灰白色
36	10	9	A-4S		肩部破片	密・良好・にぶい褐色
37	10	10	SP01		口縁部破片	密・良好・浅黄褐色
38	10	10	A-1S		体部破片	密・良好・にぶい橙色
39	10		A-1N		体部破片	やや粗・良好・黑褐色
40	10	10	SF01		口縁部破片	やや粗・良好・灰色
41	10	10	SF26		口縁部破片	やや粗・良好・黑色
42	10	10	SF104		口縁部破片	密・良好・灰褐色
43	10	10	A-2N		口縁部破片	密・良好・灰褐色
44	10	10	SF10		口縁部破片	密・良好・灰白色
45	11		A-4S	(15.7)・(4.9)	口縁部1/8	密・良好・灰白色
46	11	8	A-1S	13.5・3.7	3/5	密・良好・灰色
47	11	8	A-1N	12.4・4.6	元形	密・良好・青灰色
48	11	8	SX194	(14.7)・6.5	1/2弱	密・良好・青灰色
49	11	8	A-1S	(12.5)	口縁～体部1/3	密・良好・灰白色
50	11		SP69	(12.0)	口縁～体部1/7	密・良好・灰色

表3 出土土器一覧表2

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	法量(口径・底面・高さmm)	残存部位・残存率	胎土・焼成・色調
51	11	A 3N	(11.5)	口縁～体部1/12	密・良好・灰色	
52	11	A-4N	(9.6)	口縁～体部1/6	密・良好・灰色	
53	11	A-1S	(9.7)	口縁～体部1/6弱	密・良好・灰色	
54	11	A-1N	(11.8)・2.7	1/2	密・良好・灰白色	
55	11	A-2S	(11.0)・3.4	口縁部1/2～底部	密・良好・オリーブ灰色	
56	11	A 3N	(9.4)	底部～台部1/6弱	密・良好・青灰色	
57	11	A-1N	(11.2)	口縁～体上部1/6	密・良好・灰白色	
58	11	A 4S	8.3	口縁部1/2～腹部	密・良好・灰白色	
59	11	A-1S		体部1/5弱	密・良好・灰白色	
60	11	A-4S	(10.5)	口縁部1/6	密・良好・暗青灰色	
61	11	A-2N		注口部	密・良好・灰白色	
62	11	A 1S		口縁部破片	密・良好・暗青灰色	
63	11	A-2S		口縁部破片	密・良好・青灰色	
64	11	A-2N		口縁部破片	密・良好・灰色	
65	11	表土		頸部破片	密・良好・灰色	
66	11	A-3N		口縁部破片	密・良好・灰オリーブ色	
67	12	8	SX194	13.4・4.9	完形	密・良好・橙色
68	12	8	SX194	12.6・5.5	口縁部7/8～底部	密・良好・橙
69	12		A-1N	(12.0)	口縁～体部1/5	密・良好・浅黄橙色
70	12	8	SX194	12.8・4.9	完形	密・良好・橙色
71	12		SX194	(12.4)	口縁部1/3	密・良好・橙色
72	12	8	A 1S	(13.5)・8.9・9.7	口縁1/2～脚1/3	密・良好・橙色
73	12	7	A-4S	11.8	坏部1/2～接合部	密・良好・橙色
74	12		A-4S	(8.9)	脚部1/2～脚部	密・良好・橙色
75	12	10	A-1N	(10.9)	脚部1/8～脚部	密・良好・橙色
76	12	8	A 1S	13.2・4.3	口縁1/2～天井部	密・良好・桔色
77	12		A-1N	(12.8)・4.3	1/3	密・良好・浅黄桔色
78	12	10	A-1S		脚部	密・良好・桔色
79	12	7	A 1S		口頸部1/3～底部	密・良好・浅黄桔色
80	12	10	SX194	(14.4)	口縁部1/3	密・良好・にぶい黄桔色
81	12	10	SX194	(17.9)	口縁～体上部1/4	密・良好・桔色
82	12	10	A-4S	(14.6)	口縁～体上部1/4	密・良好・桔色
83	12		SX194	(16.7)	口縁部1/3	密・良好・にぶい黄桔色
84	12	10	A-4N	(14.2)	口縁部2/5弱	密・良好・桔色
85	12	10	A 2N		把手	密・良好・浅黄桔色
86	12	10	A-1S		把手	密・良好・桔色

注 出土位置のNはグリッドの東半部、Sは西半部を表わす



調査区全景（西から）

図版 2



1. 調査区全景（東から）



2. 調査区遠景（北から）



1. 土層断面

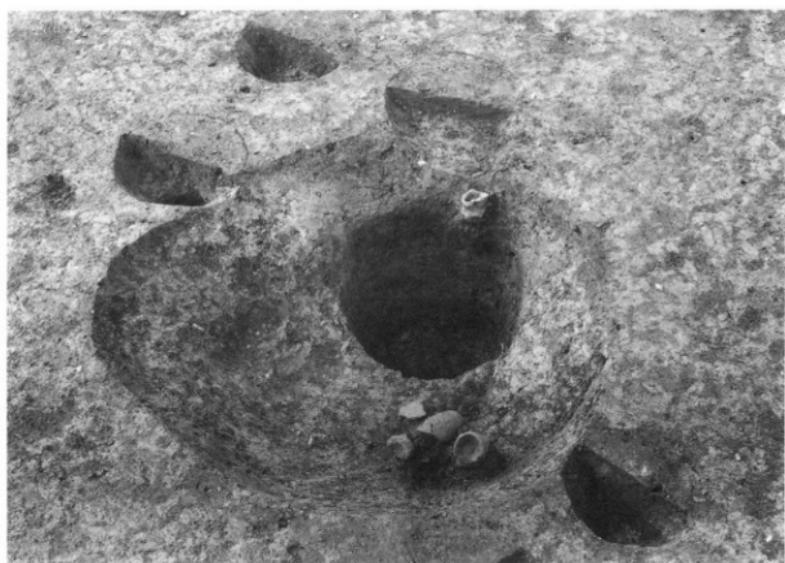


2. 土坑SF26 土器出土状況

図版4



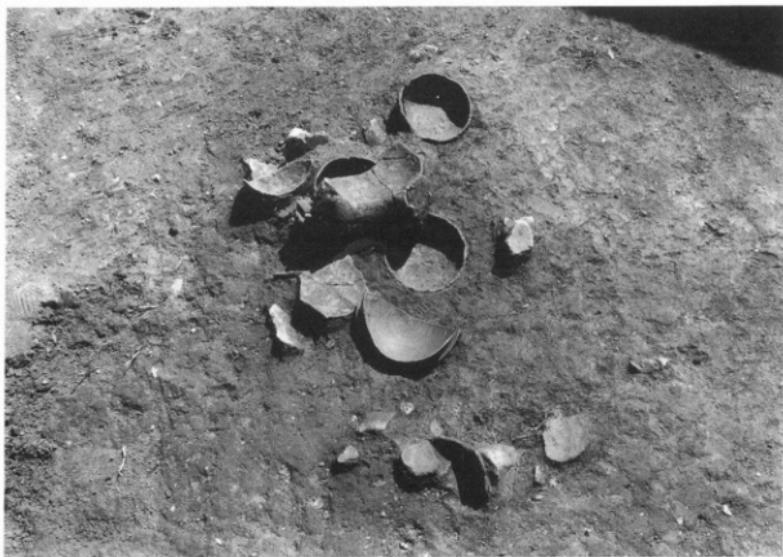
1. 土坑SF107 土器出土状況



2. 土坑SF10 土器出土状況



1. 土器集中箇所SX194 土器出土状況（東から）



2. 土器集中箇所SX194 土器出土状況（北から）

図版 6



1. A-1グリッド 土器出土状況



2. ピットSP145 土器出土状況



3. ピットSP53 土器出土状況



1



10



2



73



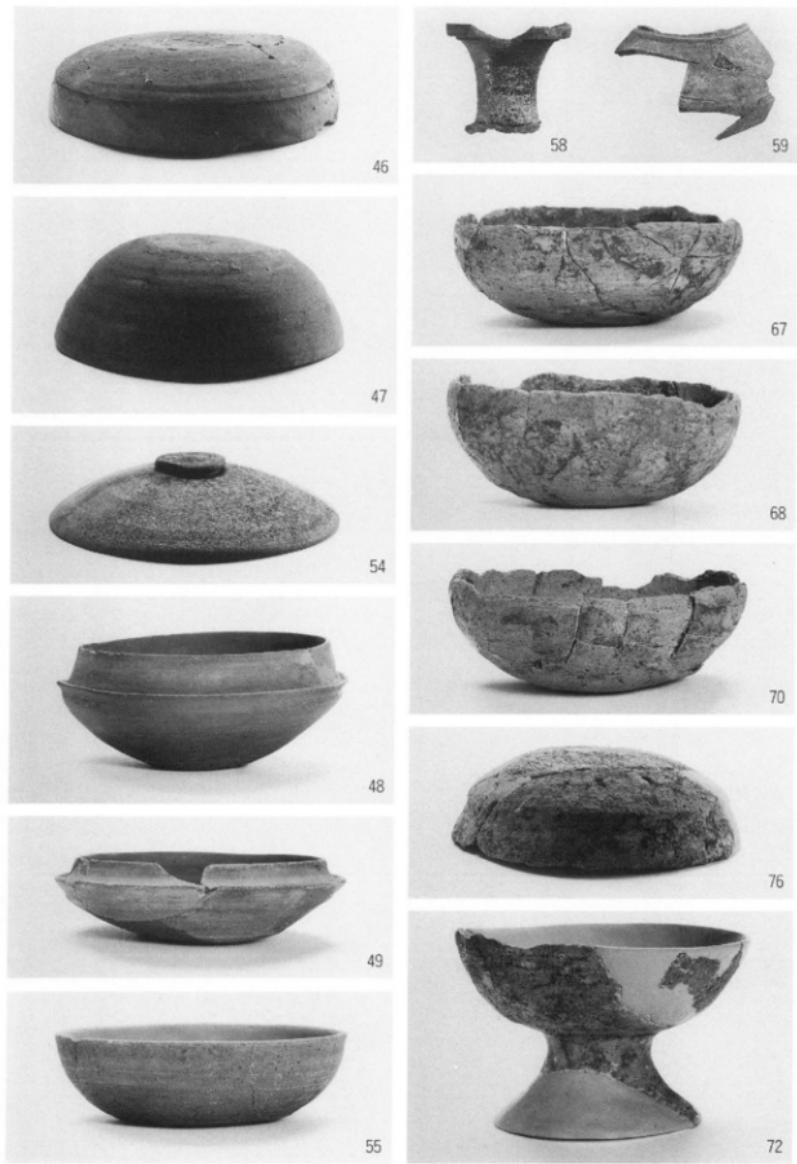
9



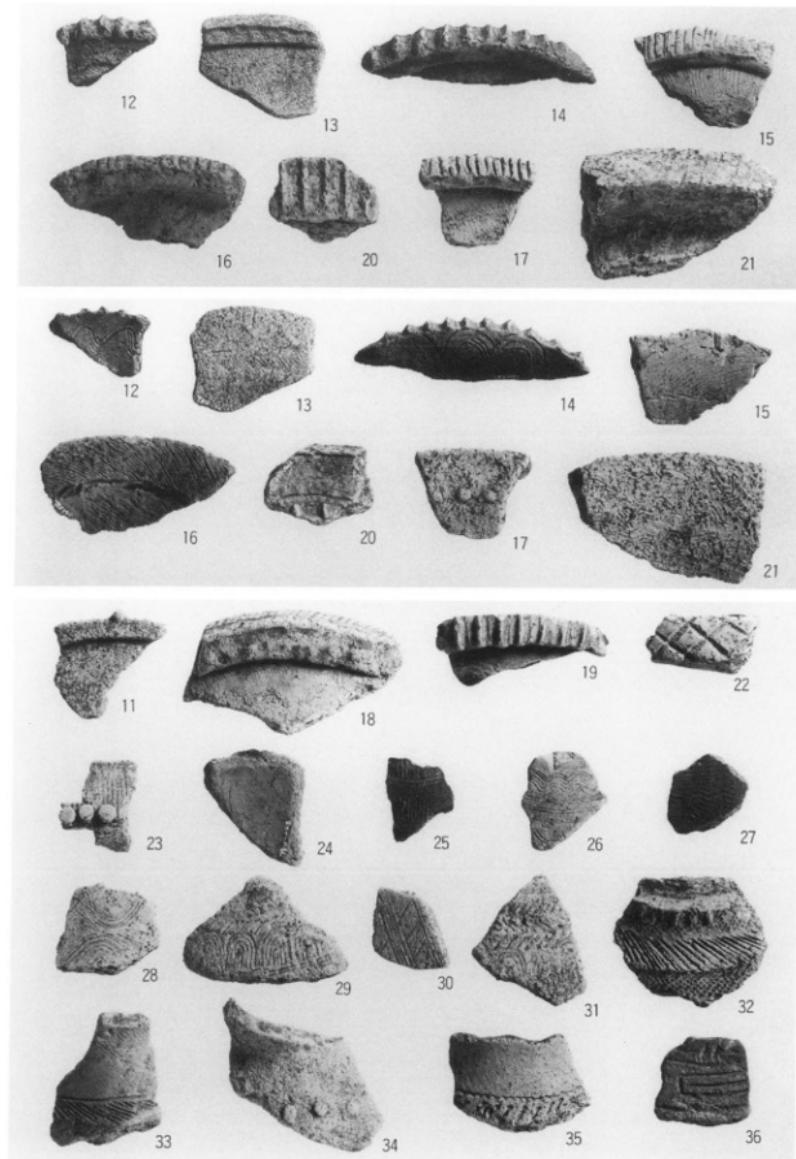
79

出土土器(I)

図版8

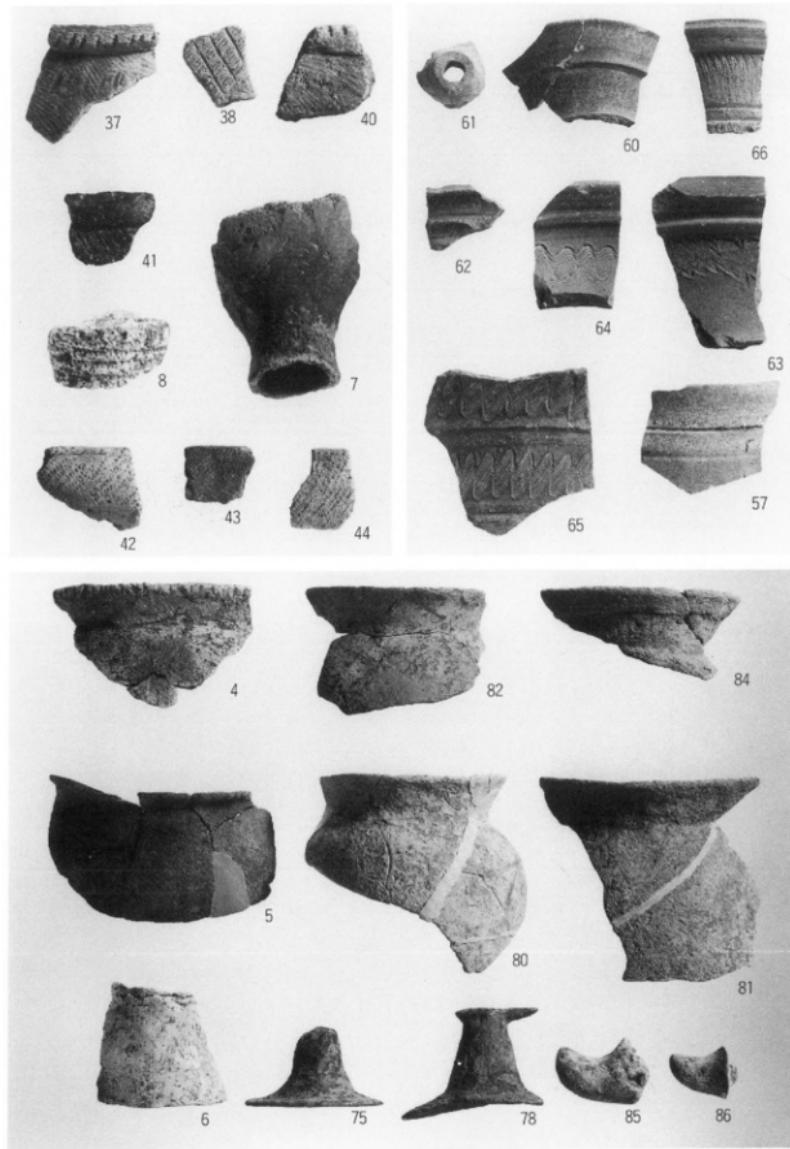


出土土器(2)



出土土器(3)

図版10



出土土器(4)

報告書抄録

ふりがな	かけのうえいせき
書名	掛之上遺跡
副書名	二級河川原野谷川社会環境基盤重点河川事業（地方特定）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書
シリーズ番号	第110集
編著者名	飯塚晴夫
編集機関	静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 TEL054-262 4261
発行年月日	西暦1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
掛けのうえいせき 掛之上 遺 蹤	静岡県袋井市 萬尾	22216	151	34度 44分 30秒	137度 55分 52秒	19970901 19971017	120	原野谷川改 修工事に伴 う事前調査

所収遺跡名	種 別	主な年代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項
				主 な 遺 物	特 記 事 項	
掛之上	墓 集 落	弥 生 古 墳	土坑 柱穴 土器集積	弥生土器 須恵器 土師器		

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第110集

掛之上遺跡

平成9年度二級河川原野谷川社会環境基盤重点河川事業
(地方特定)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成10年3月31日発行

編
発
行

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20
TEL 054-262-4261㈹

印刷所

黒船印刷株式会社
〒422-8033 静岡県静岡市登呂2丁目4-25
TEL 054-286-0236㈹